

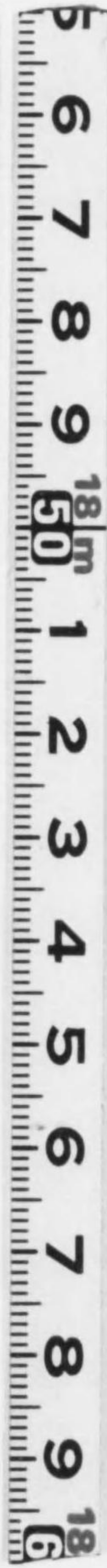
408

特252

958

日本國體の話

附録 明治大帝の聖徳に就て



始



特 252
958



日本國體の話

附録 明治大帝の聖徳に就て――



自序

日本とは如何なる國か——如何に尊い國であるかと云ふことは、我々日本人としては誰しも知つてゐることではあるが、然らば何が故に？如何にして？斯く在るか？と問ひつめて行くと、單に漠然としてそう云ふ感念を持つてゐる者が多いのである。

否唯にそれのみならず、甚だしき者に至りては智識あり、學問ありと稱せらるゝ輩の中に天皇機關説を信奉して問題を起したり、宗教を假面として驚くべき國體破壊をもくろんでゐた大本教の如きものがあつた。

尙又這般の帝都事件に際しては、この國家の非常時を顧みず黒田某外十名の者は國際スパイとして某々國のため盛に暗躍した怪事實がある。之に依つて之を観るに、之等は何れも我が國體の尊嚴なる所以を知らざるところより起つた最も慨歎すべき現象であると謂はなければならぬ。編者茲に深く考ふるところあり、一片秋々の志黙して已む能はざるものあり、淺學非才を顧みず敢てこの一書を世に送る、冀はくば大方の讀者之を諒せよ。

昭和十一年の春

編者識

内容目次

(一) はしがき……………七

(二) 我が國の神話……………一〇

(三) 三種の神器について……………一五

(四) 祭政一致と云ふこと……………一八

(五) 輝く皇室の御稜威……………二一

(六) 日本國家の特性本質……………二五

(七) 日本思想の特色……………三〇

附 録

明治大帝の聖徳を偲ぶ……………三七

日本國體の話

はしがき

一體、人生に於て一番貴重なるものは何んでありませうか。これについて文學博士田中義能先生は、『世に貴重なるものは澤山ある、或者は財産と云ふであらう、或人は名譽と云ふであらう、又或者は生命といふであらう。しかし私はその中において最も貴重なるものは、國家であると考へる』と云はれました。

然り、人生において、最も貴重なるものは國家であります。従つて日本民族にとつて、最も貴重なるものはわが日本國であります。なぜ國家をもつて最も貴重なりと云ふか。これについて田中博士は説いて曰く、『國家が混亂の狀態に陥つた場合、いかに財産が貴重であるといつても、どうしてそれが保護せられるか。盜賊横行して一日も安全を得ることは出來まい。又國家が混亂の狀態に陥つた場合、名譽といふものが何處にあるか、或は權力といふものが何

處にあるか。名譽を侵害せられても訴へる所がない。權力を無法に褫奪せられても如何ともすることが出来ない。或は生命が大事であると云ふのであるが、フランス革命の時においては、人々の生命は明日をも測られなかつたといふことは、歴史を少しでも學んだ者の皆知つてゐる所である。國家が混亂に陥る時は、生命の安全といふことは到底期待することは出来ない。

然らば我々の貴重なりとする所の財産、名譽、權力、生命といふものゝ源泉は國家にある國家が背景になつて初めて生命を維持することが出来る。權力も名譽も財産も、その光を現すことが出来るのである。以て如何に國家が人生に於て貴重なものであるかゞ判ると思ふ。』と

かく、人生において一番貴重なるものは國家であります。世界の漂泊者たる猶太人も、國家なくしては生きられない、されば他の國家の厄介になつて即ち徳富蘇峰先生の曰へる如く、他の軒下に立ち、籬邊に倚つて、その財産や、名譽や、權力や、生命を保持してゐるのであります。不完全なる國家の、いかに悲惨なるかは、隣國支那を見れば、直にわかることです。

思ふに、古今東西、多くの國家は興り、又亡んでゆきました。一浮一沈、實に泡沫の如きものであります。その中にあつて、ひとりわが日本のみ、永遠に一國をもつて樹つ。これ眞に人

類史上の偉觀であります。しかし、わが日本が天壤無窮一國をもつて即ち永遠に變らざる國體をもつて、進歩發展してゆくのは、決して偶然のことではありません。本來の性質の然らしめるところです。諸國は國家を造ては滅し、滅しては造つてゐる、それは恰も、最初の設計が悪くて、家を建てかけては、途中で設計のやり直しをするが如きものです。しかるに日本のみは、たゞ一つ日本のみは、何たる幸福光榮ぞや、最初の設計が完全無缺であつたので、設計のやり直しをせず、終始一貫して、日本國家を無窮に發展させ得るのであります。かゝる國家に生を享けたる我々は實に世界に於ける第一の仕合者と云はねばなりません。

日本こそは、選ばれたる國と云ふべきです。三千年を経るも國體に變りなく生々發展してゆく國家、これこそ世界に特異なる光を放てる國であると申すべきです。廣い地球上に永い／＼年の間に一つだけ、かゝる國がある、これ正に神に選ばれたる國に非ずして何ぞ。かく考へる時われ等日本國民は他の國民が自國を貴重なりと考へるより以上に深刻に、日本國を貴重なりと考へるのです。國を貴重なりとする考へは即ち愛國心です。愛國は即ち忠君です。忠君愛國の精神が熱烈なればこそ、この國は永久に榮えるのであります。

我が國の神話

先づ我々は、わが國の神話を知つておかねばなりません。よつてこゝに、その概略を極く簡單にお話しませう。詳しくは『古事記』と『日本書記』をお読みになつて知つていただきたい。

最初の三神 天地開闢のときに、三方の神様がゐらつしやいました。即ち天之御中主神、高皇産靈神、神皇産靈神です。

次の二神 その頃は天地がまだ涯もないぶよ／＼とした大きな塊のまゝで、油を浮したやうに、とろりとろりと浮いてゐました。そのときに葦の芽の吹き出るやうに吹き出たものから、お生れ遊ばしたお二人の神様がりました。そのお名は可美葦牙彦舅神、天之常立神です。

その次の二神 次いでお生れになつたのは國之常立神、豊雲野神のお二方です。

伊弉諾命と伊弉册命 それから次々に八人の神様がお生れになり、九人目に伊弉諾尊がお生れ遊ばし、十人目に伊弉册尊がお生れになりました。

さて諸々の天神（こゝでは最初に見えたる天之御中主神、高皇産靈神、神皇産靈神、可美葦

牙彦舅神、天之常立神の五柱の神）はこのお二方の神即ち伊弉諾尊と伊弉册尊に對して『この漂つてゐる國を修理固成せよ』と仰せになり、天の沼矛といふ立派なひとふりの矛をお授けになりました。そこでこのお二方の神様は、矛をお持ちになつて、天の浮橋の上にお立ちになりました。天の浮橋といふのは、大空に雲を貫いて架けられた壯麗な虹の橋であります。

さてお二方の神様はその橋にお立になつて、矛で大海原をおかきまはしになり、矛をお上げになると、矛の先から海水がしたゝり落ちました。その雫が固まつて一つの島が出来ました。それを自凝島と名づけました。これが今の淡路島だと云ひます。この島に八尋殿といふ御殿をお作りになり、こゝにこのお二方の神様はお住ひになつて、そして

四國、隱岐、築紫（九州）、壹岐、對島、佐渡

の島々をお生みになり、最後に一番大きな本洲をお生みになりました。そしてこれに大倭豊秋津島といふ名をおつけになりました。かうして日本の國土が出来ました。

國を生むといふ事に就て こゝにちよつと國を生むといふことについて説明をしておきます。右の通り伊弉諾尊と伊弉册尊の二神が、日本の國（大八島國）を生み給ふたとあります。常識か

ら考へて、かゝる國士を生むといふことはできません。しかし、この國を生み給ふたといふ所に微妙さがあるのです。生まれるといふのは、自然の力によつて出で來つたといふことで日本國は人爲の國でなく、自然の發達によつて出來た國だといふ意味になるのであります。

黄泉の國へ このお二方の神様は、かうしてお國をお生みになり、更に多くの神様をお生み遊ばしましたが、最後に伊弉册尊は、火の神様をお生みになつたので、つひにこの世をお去りになつて、黄泉國へおいでになられました。

三人のお子様 おひとりになられた伊弉諾尊が左のお目をお洗ひ遊ばすときに、お生れになつたのが、大日靈尊(天照大御神)で、右のお目をお洗ひ遊ばすときにお生れ遊ばしたのが月讀命で、お鼻をお洗ひ遊ばすときに、お生れ遊ばしたのが素盞鳴尊であられます。

天照大御神 大日靈尊は女神様で、光彩赫耀として世界に輝くとも申し上げたい程お立派な尊い方でありましたので、天照大御神と申し上げ、多くの神々はみなこの大御神様に心服しました。そこで、天照大御神は、高天原を、月讀命は夜の國を、素盞鳴尊は海原を統治されることになりました。

天の岩戸の變 素盞鳴尊はまことに亂暴で、いろ／＼のいたずらをされましたので、天照大御神はとう／＼御腹立になり、天の岩戸といふ石室の中へお隠れになりました。それからといふものは世界はまつくらで、晝も夜も區別のない常闇の世界となつてしまひました。

かうなると悪神達がはびこつて、いろ／＼の禍ひがおこりました。八百萬神達は大變心配して、何とかして大御神様に出でただかなくてはならぬといろ／＼協議をしました。その結果岩戸の前に澤山の鶏を集めて、ひつきりなしに鳴かせました。天香具山から神を根ぬきのまゝ抜いて來て、その技へ八尺瓊の曲玉をつけ、八咫の鏡をかけ、白や青の美しい布をつりさげて飾りました。岩戸の前では、天宇受女命といふ踊の上手な女神が、面白く踊り出しました。多くの神様は、その踊の容子がかしいので、どつと一度に笑ひ出しました。外では大變な騒ぎなので、大御神は何事であらうと岩屋の戸を少しお開けになつて外の様子をおうかがひになりました。その時、一人の神様が八咫の鏡をつけた神を大御神の前へ出しました。鏡には御自分の鮮しいお姿がうつりました。

『おや、これは誰だらう』と仰りながら、少し外へお出ましになつた時、大力の手力男命が

いきなり大御神のお手をとつて外へおつれ出ししました。そして

『もうこれからはこの中へお入り下さらぬやうに』とお願ひし、岩戸には七五三繩を張りわたしました。かうして天地は再び輝かしい世界となりました。

大國主命 素盞鳴尊はあまりいたづらなさるので、とう／＼逐はれて出雲へおゆきなさいました。こゝで大國主命をお生みになりそして遂に海原へ行つてしまはれました。

天照大御神は、豊葦原瑞穂國（日本）を、皇孫に統治させようとお思ひになりました。がそこには素盞鳴尊のお子様の大國主命がゐらつしやるので、先づお使ひをお出しになつてそのことをお話しになると、大國主命は『大御神の御子様が天日嗣であられるから、自分は當然この國を大御神様のお子様にお返しして服従する。』とお答へになりました。

天孫降臨 そこで大御神は、お孫様の瓊々杵尊を降臨せしめられることになり。

『葦原の千五百秋の瑞穂の國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就て治らせ。さきくませ。寶祚の隆まさんこと、天壤と窮まり無かるべし』と仰せられ、そして三種の神器を授け給ひ、

特に『この鏡を見ること、まさに吾れを見るが如くすべし』と仰せになりました。かくて瓊々杵尊は、大勢のお供の神を引きつれて、日向の高千穂に降り給ふたのであります。この瓊々杵尊は神武天皇の曾祖父君にあられるのであります。

三種の神器について

三種の神器のうちでも、八咫鏡は天照大御神の御姿をおうつしになつた寶鏡で、大御神が、これを皇孫瓊々杵尊にお授けになります時に『この鏡は、わが御魂として、常にわが前にあると思ふて、あがめたてまつれ』と仰せられたのであります。よつてこの御鏡を代代の天皇は皇居の中で、天照大御神としてお祭り遊ばしたのであります。

しかるに第十代崇神天皇は、常にこの御鏡に近づき奉つて、ひ天照大御神の御威徳を、おけがし申すやうなことがあつてはならぬといふ、深いお考へから御鏡を皇居から敬遠し別にお宮を造られ、そこにお祭り遊ばしたのであります。次で第十一代垂仁天皇の御代に、この御鏡を、更に伊勢にお遷し申しました。これが今の伊勢の皇大神宮です。

草薙劍も御鏡といつしよに、伊勢の神宮にお祭りしたのでありますが、第十二代景行天皇の皇子日本武尊が、御東征にお出かけ遊ばす時、御叔母様にあたらせられる倭姫命が尊の御身の護りとしてお授けになりました。尊は御東征よりお歸りの途中、この御劍を尾張の熱田にお置きになつたまゝ御病氣におかかりになつておかくれ遊ばしたので、そのまゝここで御劍をお祭りすることゝなりました。これが今の名古屋の熱田神宮であります。

かくの如く崇神天皇は、御鏡と御劍とを遷座され、別にお祭り申すやうになさいましたので代りの御鏡と御劍とをお造りになりました。御玉だけは皇居にお置きになつてゐますのでこの模造の御鏡と御劍と共に、常に御身近くにお置きになり天皇の御位のしるしとなさいました。

御鏡と御劍とは皇居よりお出して、別にお祭りになつたのに、御玉のみはなぜ別にお祭りにならず、そのまゝ今日まで皇居にお置きになつてゐるのでせうか。これについて伊藤武雄先生は次の如く云つてゐられます。(文章は平易に書きかへました。)

さて然らば、神爾即ち八尺瓊曲玉のみは、なぜ模造せられなかつたか。なぜ奉遷せられなかつたか。思ふにこの御玉こそは、天皇を表徴するものであるがゆゑに、常に天皇に副ふことを

要し、又、一切の疑似を絶対に避けられるために、奉遷も模造もされなかつたと解してよからう。神璽(玉)といふ言葉は、或時は神器を指すのである。かく神器といふ言葉をもつて、御玉の稱呼とすることは、恰も花といへば櫻花を指す如く御玉に、天皇の璽符(しるし)たる神器を第一に代表する意味性質があると見てよい。又、神璽(玉)といふ言葉は、天皇の印璽(しるし)の意にも用ゐる。御玉を神璽といふことは、御玉が三種の神器の中で、天皇の璽(しるし)たる性質を帯びるものだからである。神璽たる御玉は、されば天皇の印璽の本體である。

右の如きわけから、天皇のおそばより離すことはできないのである。否、天皇がこれを常にお持ちになることによつて、益々神璽(玉)たる崇高さを發揮されるのである。日月の模すべからざると同じ嚴格さをもつて神璽は模造をなすべきでない。

かく御玉のみは、模造せられなかつたのは、それがたゞ神器であるがゆゑでなく、天皇の印璽たる神器であるからだと思ふ。これに對し御鏡は天照大御神の御魂代たる神器であり、御劍は皇祖皇孫の守護たる神器である。御魂代たる神器はそのものを保護するといふ上から見て、その模造物を作り、そして恐畏敬事の誠をつくしてもさしつかへない。又守護たる神器はその

傳來を尊重し、庇護し、別に作つた模造物を、常にそばに置かれて守護の威靈を仰がれてもよい。しかし印璽たる神器に至つては、模造といふことを超越して、嚴正にその唯一を保持せねばならぬ。と。

さてこの模造の神器といへどもこれを敬畏せらるゝことは、原の神器と異らぬのでありまして、それは模造の寶鏡を、別殿に奉齋されたことによつても明かであります。かく御鏡は別殿に奉安されましたが、御劍と御玉とは常に天皇に隨御します。宮中におかれては今は劍璽の間を設けられ、こゝに御劍と御玉とが安置し奉つてあるとのことです。

祭政一致

日本では神を祭ることをマツリといひ、國をおさめること即ち政治のことをマツリゴトといひます。マツリとマツリゴト——即ち祭と政とは、言葉の本が同じであります。なぜ、神をマツルといひ、政治をマツリゴトといふのでせうか。それは、祭りも政治も本が一つものであるからです。それゆゑ祭政一致といふのです。かういふことは日本だけのことで、こゝに日本國

の特色があるのです。わが國では神を祭るといふことは大變に重いことなのです。されば天皇陛下は、祭りといふことには、非常にお力をおつくしになります。天皇陛下は國民の大祭主として、一切の祭りをなされる中心であらせられ、伊勢神宮を初め、すべての神を、おまつりなされるのであります。宮中には賢所や、皇靈殿や、神殿などを設けられ、神々をお祭りになつてゐます。そして天皇陛下親らお祭りをなされます。

一體、『マツリ』とは、祖先の神靈を祭ることです。いひかへれば、皇祖皇宗を始めとし、諸々の神をお祭りすることです。

そこで、マツリといふ言葉をつゞめたものであつて嘆字で書けば『待張』又は『交り』であります。

待張とは、神々が、子孫が來て祭るのを、待ち設けらるゝといふことで、親しみの意味があります。

また、交りとは、子孫が、祖先の神靈にしたしみ、接するといふ意味です。

そこで、天皇陛下が、皇祖の神意を受けさせられ、それを國民に施し行ひ給ふのが、『マツ

リゴト』(政治)です。

ゆゑに、祖先の神靈に對せられるときには、『マツリ』(祭り)となり、國民に對せられるときには『マツリゴト』(政治)となるのです。

日本の神様は、西洋の神や、佛教の佛とは違つて、昔、この世に、實際に住んでゐられたと思はれる祖先を、神様としておまつりして、おがむのであります。ゆゑに、神様を敬ふことは同時に祖先を敬ふことでもあります。これを一口に云つて、敬神崇祖と申します。

順徳天皇が

『朝廷には、いろ／＼の作法はあるが、神事を先に行ひ、他の事を後にすること。朝も夕も、神を敬ふことを怠つてはならない』

と仰せられました。すべての天皇は、みなこの心で、敬神といふことには、特に御心をそゝがれてゐるのです。

國民の父であらせられる天皇陛下、國民の大家である皇室が、國民を代表なされて、かく敬神崇祖といふことを、大切にされてゐるのです。従つて日本國民のすべても、敬神崇祖とい

ふことを、大切にされてゐるのであります。これが日本の國民精神の、最もすぐれた美しい特長であります。

もし、敬神崇祖といふことがなくなつたら、日本國は衰亡する。

わが國には、神様をおがむ他に、いろ／＼の宗教があります。佛教もあれば、キリスト教もあります。その家々によつて宗旨が違ひます。

しかし、日本人である以上は何よりも先に日本の神様をおがみ敬ふことが大切であります。

輝く皇室の御稜威

天には輝く永遠の日の光り。

地には永遠に榮える日本の國。

先づ試みに、世界地圖を開いて見ませう。——地球上に多くの國があります。が太古から今日に至るまで果して現今の状態を維持して來た國がござらませうか、——つまり國體も變らず、領土も變らずに、何千年といふ間、すつと引續いて同じ國體、同じ領土を保つて來た國がござ

ませうか。支那は古い國である、が常に易世革命の國です、米國は建國以來同じ領土を保つてゐるが、これは何しろ新しい國で百四五十年にしかありません。その他の國々は、盛衰興亡常なき有様で、今日、世界の大國強國と威張つてゐる國も、その歴史は決して神聖ではありません。あゝかの二百萬の軍隊を引受けて戦つたギリシャ—アゼンス、スパルタの國は、今何處に在りや、世界征服の雄圖をいだいたアレキサンドル大王の領土は今何處に在りや。又或は、かの雄大なるローマ帝國は、今何處にありや。それらの國々が占めてゐた所の土地は依然として遺つてゐますが、その國々は亡びて既に二千年。あはれ遠き昔の夢となつてしまつてゐます。然るに我が大日本皇國は、幾千年の久しき間、東海の表に國をなして、萬世一系の天皇を戴き、寸土も外國に侵されたことなく、實に正確に健全に金匱無缺の國家を維持し、而も大に雄飛しつゝあるのです。ドイツ人で、わが國醫學界の恩人であつたシーボルト氏が、

『西洋各國における革命は國王に対する不平不満がもととなつて起り、そしてその結果は、國王の權威が縮められたり、或は顛覆されたりしてゐるのに、日本ではそれと反對で、革命ごとに皇室の御稜威はますます輝き、その繁榮は増進してゐる。實に結構な國であり。又不思議な

國である。』

と云ひました。まことに、外國人の眼をもつて見れば、日本は實に不思議な國でありませうだが、實はすこしも不思議ではないのであります。それに『日本ではそれと反對で革命ごとにと言つたのは當りません。

日本には、建國以來、革命はないのであります。革命の起るべき理由もなく、必要もないのであります。

シーボルト氏は、國家には革命がつきもので、いかなる國家も、永い間には、興亡隆替があつて、その興亡隆替を促すものは革命であると観てゐるのであります。そして事實、日本以外のすべての國家は、その通りです。たゞ世界に一つ日本だけは特殊の事情のもとに進んで來て、一度だつて革命はないのであります。

シーボルト氏が日本の革命と見たのは、實は政變といふべきもので、それは西洋や支那の革命とは全然性質が違つてゐるのです。

外國の革命は、國王に對する不平不満から起つた、ゆえにその結果は、國王の權威の減退、

又は滅亡となるのでありますところがわが國の政變、若くは維新は、皇室の御稜威を蔽ふ障礙物を除いて、國家を本當の姿に立て直さうとする國體擁護運動であります。ゆゑにその結果は皇室の御威稜はますます輝き、その御繁榮は増進することゝなるのであります。そして國民は皇室の御稜威が輝き、皇室が御繁榮遊ばさるゝことをもつて即ち國家の繁榮であり、又國民の繁榮であり、幸福であると考へてゐるのであります。

右の事情を知らない外國人から見れば、日本は實に不思議な國であります。日本國民から見れば少しも不思議ではなく、實に當然なことなのであります。

外國の革命は國王（王室）に對する不平不満から起り、日本の政變は、皇室に對する尊敬親愛の念から起るのであります。皇室と國民との間の邪魔物を拂ひのけよう、皇室の御稜威を曇らすものを打ち拂はうとする運動です。ゆゑに日本の政變を、局面打開といふ方面から見れば維新です。日本國の本當の姿にかへるといふ精神から見れば復古です。また皇室を尊崇するといふ精神から見れば尊皇です。

君民同祖——即ち君も民も祖先を同じうし、血族關係を有する。血族の關係のない者が、偶

然君臣の關係を生じて、権力や義理づくめで結びついてゐるのは違ひ、わが國の天皇は日本民族の族長であらせられる。民族の本系、本家、宗家であらせられる。即ち天皇は、われわれ國民の父であらせられる。この血族關係から自然に流れ出づる君臣の親愛の情は、到底外國人の味はふことの出来ぬものなのです。そしてこの自然の君臣の親しみの一面に、建國以來、君臣の分が確立されてゐます。即ち萬世一系の君主——天皇を國家の中心と仰ぎ、天皇を神として尊ぶの一面には父としての親愛の情を捧げる。天皇また國民を子の如く愛し給ふのです。

日本國家の特性本質

國體とは何ういふことかといへば、『その國の特性本質』のことをいふのであります。ゆゑに日本の國體といへば、『日本國家の特性本質』のことをいふのであります。日本國家の特性本質は、上來説いて來たところで、ほどお分り下すつたことと思ひますが、これを要約して申せば、

萬世一系の天皇を神及び父として戴き、この天皇を中心として出來てゐる家族的、道德的の

國家である。

といふことです。なほこれを池岡直孝先生の説に據つて説明いたしませう。

第一に、わが天皇は、神であらせられます。國民が天皇を信仰して神とするのであります。第二に、わが國は天皇（皇室）を中心とする綜合家族制度の國であります。

人間が、社會を作るのに、最も自然なものは、血族の集りであります。それゆゑに、血族中の血族であるところの家族といふものは、人間の社會の本をなすものであります。そして、この家族生活においては、その中で血統的に一番尊いものが上位にあつて、家長となり、統一の中心となるのが、自然でありまた當然のことです。こゝに家長家族制度といふものが、自然に發達するのであります。

この家長家族制度では、血統を重んじ、家長の直系の子孫が、代々家長となつて、永くその家を傳へてゆきます。これは現に我々の一家において見る通りです。

わが國はこの家長家族制度が國家的に擴大せられて——即ち綜合家族制度となり、その綜合家族の家長が天皇であらせられて——三千年の間、自然な發達をなして來たのであります。

西洋でも、大昔は家長家族制度でありましたが、それが減びて、今では夫婦家族制度となり家は一代限りのものとせられるに至りました。なぜ減びたかといふと、

民族の移動のためと、

キリスト教の個人主義の思想に影響されたためと、

産業の發達のためと、

この三つが主要なる原因であります。ゆゑに、今の歐米各國は、個人主義を本として出來てゐて、武力、知力の優れてゐる者が、支配者たる地位につくことが出來ます。

ところが、わが國は、前述のやうに、綜合家族制度——即ち國そのものが一つの大きな家長家族制度となり、皇室は、日本といふ一大家族の中にあつて、血統の上から見て宗家に當り、天皇はその宗家の家長であらせられ、最も自然的に國家統一の中心として最高の地位を占めてゐられるのであります。

これを小にしていへば、我々の一家において、家長即ち戸主となる者は、自然に家長となる父はどこまでも父であります。他から勝手にやつて來て、俺が家長である、俺が父であるなど

いへば、それは不自然極まり、不道理極まつた話で、誰も承知しますまい。

それと同じ道理で、日本といふ大家族の家長たる天皇の御位地は極めて自然であり、當然であつて、そこに人爲的の無理はすこしありません。

第三に、わが國は、君民の關係が道德的であることです。

これは、前述の通り、わが國が血族國家即ち綜合家族制度の國家であるからです。君民は血族ですから、その間には、おのづから愛情が、交流します。即ち君民の間には、『義は君民にして、情は父子』といふ美しい關係があるのであります。つまり、君民の間には、情理兼ね合せた美しい道德關係があるのであります。文學博士深作安文先生曰く『わが國に於ては、君主と人民との關係は君臣たると同時に父子であつて、御歴代の天皇に於かせられては、何れも深く人民を愛撫し給うたことは、恰も慈母の赤子に於けるが如く、人民が君主を仰慕し奉ること猶赤子の慈母に於けるが如くである。雄略天皇は、『義ハ乃チ君臣、情ハ父子ヲ兼ヌ』と仰せられてゐる。これによつてこれを觀れば、君臣即父子であり、忠即孝である』と。

かゝる君臣の關係は、全く他國に例のないもので、わが國の美しい特性の一つであります。

第四は、敬神崇祖といふことであります。崇祖とは、祖先を崇ふことであります。わが國は前述の通り、家長家族制度の國であつて家といふものを、祖孫一貫せる存在となし家長が家族を治め、家長は血統によつて代々傳へ、家名を尊重し、家の永遠なる永續發展を願ふのであります。されは、祖先を尊崇敬慕し、祖先に報恩感謝し祖先の遺訓を尊重遵守するといふところから、祖先の靈を祭るのであります。これは、上において皇室が模範を示され、下國民に普及してゐます。祖先は、家祖と國祖との二つに分けて見るのが便です。家祖とは我々國民各個の家祖先です。これは我々の家において祭つてゐます。

國祖とは國家的に見ての祖先です。わが國は家が擴大したものですから、直接の血統がつながつてゐないでも、過去の人は國といふ大きな家の祖先です。わが國の神は、我等の國家的祖先であつて、人間界を超越した西洋の神や支那の天の如きものではありません。我々が神を敬するのは、つまり國家的祖先に對し、感謝の誠を捧げるのであります。ゆゑにわが國においては、敬神と崇祖とは一つのものであります。以上の四つがわが國の特性本質であります。これがわが國體であります。

日本思想の特色

日本の思想と、西洋の思想と、どう違ふか、その根本的な著しい點を教へて貰ひたい。と、かう誰かに質問されたならば諸氏はどう答へますか。我等はそれに對して手ツ取り早く次の如く答へようと思ひます。曰く、日本の思想は全體主義、國家第一主義であり、西洋の思想は、個人主義、國家第二主義であります、と。

西洋の思想は個人主義であります、個人があつて國家がある、國家は個人のために存在するものである、個人の利益、幸福のために作つたものであるとします。個人が第一で國家は第二であるのであります。かく、個人を第一とし自我を最高とするのでありますから従つて個人の權利といふことを重んじ、何事も權利でもつて行つてゆかうとします。權利と權利とが衝突してそこに階級の争ひが起り君民の争ひが生じ國家を破壊するといふことになります。故、法學博士上杉慎吉先生が左の如く云つてゐられます。

『西洋政治の發展の跡を見るに、常に人々相疑ふを根柢とするが如くである、機械的組織(生

命のない組織即ち個人本位の西洋各國)を造りて、自分が出て行かなければ承知し安心が出来ぬと云ふのは、主としてこれに本づくかと思ふ。人の相關と連続とが完きを得るには、人皆同胞兄弟として相信しなければならぬ、相互協同せねばならぬ。しかるに人々相疑ひ、君主は人民を敵とし、人民は君主を敵とし、政黨相争ひ勞資協調せず、他人に信賴することが出来ぬといふのであつては、國家の本性を發揮することを得ない』と。

かく、西洋人は何故に人々相疑ふか。君民敵視するか、政黨相争ふか、勞資協調せぬか——これを一言にしていへば、なぜ人々信賴せぬか。それは個人主義であるからであります。自我本位であるからであります。權利本位であるからであります。これに反しわが日本は全體主義で、全體主義といふことは國家第一主義といふことであります。日本の思想は徹底したる全體主義、國家第一主義であります。國家が最高であつて、何事も第一に國家の爲め、そしてその後一切の物事を行ふべしとするのであります。個人があつて國家があるといたしません國家あつて個人は完成するものといたすのであります。

そして、わが日本においては天皇と國家とが同時にできたのであります。しかもその天皇—

皇室は、日本民族の父であり宗家であつて完全なる中心であります。されば日本民族は天皇即國家なりとするのであります。されば又、忠君即愛國なりとするのであります。天皇に忠義をつくすこと、國家を愛することは、同一であつて不二なりとするのであります。國家に奉ずるは、即ち天皇に奉ずるのであつて、この二つは實は一つであつて離れないのであります。

されば、國家第一主義といふことは即ち天皇第一主義といふことであります。天皇の御意志が國家全體の意志なのであります。即ち天皇は日本民族全體の意志を誤りなく知り給ひ、それを決定して實現し給ふのであります。こゝにわが日本の大なる特色——即ち國體の精華があります。西洋は個人主義を本とします。ゆゑに全體の意志——即ち國家の意志を知り、それを決定し實現するには多數決といふ不完全な方法でするより他に道はないのであります。しかもそれは全體の意志の決定としては頗る不完全であります。不完全であつてもやむを得ぬのであります。元來が個人主義といふ不完全なる地盤の上に立つてゐるのですから。

しかるに、わが國においては、天皇が全體の意志を實現し給ふ方として、他に比類なき資格をもつておいでになるのであります。天皇あつて、完全に全體の意志が實現せらるゝのであり

ます。これこそ、世界に模範となるべき國體であります。これこそ全體主義、國家第一主義の個人主義よりも、優れることを實證するものであります。わが日本の思想はかく、全體主義、國家第一主義でありますから本來は、人々相信じ、君民一致し、義務と義務とが美しく結び合ひ、犠牲と奉仕との道德によつて立つのが、日本國家なのであります。

これは全く、西洋とは正反對であります。西洋では君民和合の歴史なく君民鬭争であります。西洋では人々相信せず人々相疑ひました。西洋では義務とか犠牲とか、奉仕とかといふことを第一とせず、權利、壓制、抗争を第一としました。個人主義と全體主義との結果はかく相違するのであります。これについて陸軍中將佐藤清勝先生は次の如く云つてゐられます。

『我國の君民關係は、我國の政治をして直ちに道德たらしむるものである。即ち我國に於ける歴代天皇は政治を以て臣民を撫育し、愛養し、憐愍することであると觀じ給ひ、天皇の徳を臣民に及ぼし、臣民を薰化し、國家をして刑罰なき道德國家たらしめんことに努力し給ふた。これがため、臣民を愛撫し、臣民に恩恵を及ぼし、刑囚さへも放免し、實に至れり盡せりの恩恵政治を布き給ふた。これみな政治をもつて權利となさずして義務となし奉仕となし、政治を

もつて権力作用となさずして道德作用と觀じ給ふた結果であり、これが我國の政治觀である、かようにわが國に於ては政治は愛撫であり、憐愍であり、義務であり、奉仕であるとの思想の下に行はれた。政治は道德政治であつて権力政治ではなかつた。これが今日までわが臣民が、天皇の愛憐と恩恵とに感謝し、天皇を神として尊崇し、天皇に忠義を捧げ天位をして天壤無窮ならしめたる所以であり、これまた君民の相互敬愛と相互奉仕との觀念よりしたる『まごころ』の發露である。』と。かくの如き政治觀念、かくの如き君民關係——それは西洋の如き個人主義の思想からは生れ出づることはできないのであります。日本の思想の優秀精華は實にここにあるのであります。

光りは東方より、日本より。日本こそは世界に君臨すべき大思想、世界を救済すべき大思想の發電所であります。われら日本國民は、思ひをこゝに致して、眞に自重し、しかも大に躍進せねばなりません。

明治大帝を偲ぶ

敬神崇祖の御信念

明治大帝が、敬神・崇祖の御心の御厚かつたといふことは、何れの方も申されたやうであります。元始祭・新嘗祭・神武天皇祭など、賢所の御祭は、必ず御躬ら御拜が御座いました。然るに、いろ／＼の御都合上、巳むを得ず、御代拜を侍従長・掌典長、或は其の他の方に仰付けられました場合にも、必ず玉體を御清めの後、白の御召と緋の御袴に御召替の上、御座所におはして、端然と、御座あそばされ御自身、御拜になる時と、同じ御心持におはしますやうに拜されました。孔子は「神を祭ること神在すが如くす」と言はれましたが、畏れながら大帝の大御心と符節を合すやうに存ぜられました、誠に尊い極みで御座います。

御代拜の方が、無事、おつとめが終られて

「只今、滞りなく御拜を済ましました」

と復命されますと、そこで初めて御洋服に御著換へ遊ばされるのであります。この御事を以てしても、大帝が神に對される敬虔の御心のほどが、いかに徹底的なものであるかを窺ひ奉

ることが出来ると存じます。

なほ大帝は、毎朝、牛乳を召上るのを常とされましたが、前に申しました賢所へ御躬ら御拜の時は勿論、御代拜仰付けられた場合も、決してそれを御口に遊ばされませんでした。

之は別段なぜといふやうなことに御仰せになりませんでした。いつも御拜の朝に限り、御口にせられませんか大御心を推し量り奉りまして、かくまで神に對して御慎みあるかと、一同勿體なく存じたことで御座います。

(二位局 柳原愛子謹話)

仰ぐも畏き明治天皇

大帝の御幼少の頃の御生活は、申すも畏いほど御嚴重に、又御質素に涉らせられ、今日の言葉をしてすれば、鍛鍊的でも申し上げてよいやうであります。御世治しめしてからの剛毅瀟灑の御氣象も、質實儉素の御生活も、御天縱によるとは申しながら、亦御幼少時に於ける、御修徳の御發露と仰ぎ奉る次第で御座います。

侍醫の方から御轉地をお勧め申し上げるやうなことがありましたが、

『わしの身體は、若い時から鍛へた身體ぢや。寒いから、暑いからと言つて、東京を去るやうでは、終には東京で暮せなくなるぢやらう。御歴代に於かせられては、轉地なぞ決してなさらないだれでも猶、八十・九十の壽を保たれたではないか』

と仰せられて、却つてお叱りを蒙つた程だと承つて居ります。御風氣のために御熱があらせられても、少し位のことでは、容易に御假床に入らせられることなく、常と同じやうに、御規律正しい御生活を遊ばされて、御病にも打克ち給ふ程の御元氣仰ぐも畏いことで御座いました。

だん／＼世の中が奢侈に流れて行くさまを御覽遊ばされては、常に御心痛遊ばされ、よく御維新當時の御不自由さをお話しになつて東宮殿下にさへも、

『わしの若い時には……』

と仰せられては、御教訓になつたと洩れ承つて居ります。

大臣方が地方へ出張されますと、中々お金がかゝると言ふお話を御承知の 聖上は、或時のこと、

『御前たちは、わしに避寒をせい、避暑をせいと勧めるが、一寸した出張にも金がかゝつて困る／＼と言ふではないか。わしが避暑避寒をするとなると、どの位金がかゝるか分らぬ。無駄の費をせずとも我慢すれば東京に結構居られるよ』

と仰せられたさうに御座います。避暑避寒を遊ばさなかつたといふことは、かうして種々の方面から、深い配慮のおはしましたことと拜察いたします。

聖躬の御費用はあく迄も御儉素に遊ばされ、それを天災地變の御救恤とか、國家有事の際の御費用とかに遊ばされるといふことは、何と有難い思召では御座いませんか。

香川大夫は、聖上の日常の御費用がいかにもお少いの恐縮し、『何とかしてお慰め申し上げたい』と常に言つて居られました。その爲でせうか、せめては日々のお膳部だけでもと、大膳寮へ申しつけて、つとめて御馳走を差上げるやうになさいましたが、それとても、

『これは誰にやれ、あれは某に』

と上は元老・侍従から、下は内舍人・宮内の屬官まで、隱居のものにさへも、御射らへ番を定めて賜はるのでした。さうして臣下の喜ぶのを何よりのお楽しみに遊ばされました。此等の人た

ちが度々の拜領に對し、どんなに感激したかは、想像に餘りあることであります。

表御座所に於て、毎日御覽遊ばす新聞紙を一枚も反古になされず、悉く丁寧に御保存になつて、他日の御用にお備へ遊ばされましたので、侍従の方たちが、お倉の中も一杯になり、入れ場所がなくて困ると申して居つた、といふお話は、一新聞紙と雖も、粗末に遊ばされぬ御質素さと御秘密さが窺はれて、我々のために、實に尊い御手本と存じ上げ、全く恐懼の外ありません。

戦争の折の分捕品は振天府を始めとして、宮城の此處彼處に御射ら御指圖あそばされて、御陳列になりましたが、殊に名譽の戦死者の寫眞は、一人残らず御飾り遊ばされて、永く其の功を記念なさいました。皇后様始め私共は屢々御沙汰によつて拜觀いたしました。その度毎に、聖上の民草を思はせ給ふ大御心と、出征兵士の勞苦とに感激いたしました。

戦勝を祝ふ人々が、提灯をかざしながら隊を成して、宮城前に集ふ聲が聞えますと、

『提灯行列が來たやうだ、代つて受けてやるがよい』

毎夜、幾度でも、必ず斯様に御沙汰がありました。仰せを畏み待臣達はお濠の土手の上に上

り、萬歳・萬歳の聲に應ずるため、力一杯に菊の御紋の御提灯を振りました。聖上の此の有難い思召が、人々の心に響いたのでせう。その提灯の光が動く度毎に、萬歳の聲は大内山もどよむ許り、一きは盛んに起りました。

戦争中には、常に、かう仰せになりました。

『これが一ツ間違つたら、國は大變なことになる』

『この寒さでは、嘸、兵隊は辛いことであらう』

『あの事はどうなつたであらう。うまく行つてくれればよいがな』

これらの御言葉を拜承いたしては、御國の大事を御一人の御双肩に荷はせ給ふ御心の中を、推しはかり参らせて、誰一人、感泣せぬものはありませんでした。御格子になつても、御寝にならぬことが幾夜さに在りましたでせう。

はからずも夜をふかしけり國の爲

いのちを捨てし人をかぞへて

御國を思ひ、民を勞らせ給ふ御心は、自然、遠く戦地にある人々の胸にも届いたことであり

ませう。いかなる堅壁も鐵壁も打破つて、前古未曾有の勝いくさ、幾度繰返しても繰りかへしても盡きぬは、彌高き大御稜威でございます。

(元典侍 園祥子謹話)

日露戦争當時の御日常

日露戦争當時のことでしたが、それまでは、冬になると、御座所には、ストーヴをたいて御部屋の中を暖め奉つたのでありますが、戦争開始と同時に、斷然、ストーヴをたくこととお止め遊ばされて、嵐も凍る眞冬の日でも、僅に御間暖めの御火鉢と、御机のわきに小さな御手爐を御用ひ遊ばされたのみであり、又、夏は、金を熔す暑さの折にも、肋骨のついた、舊式の御軍服をおめしになつて、毎日毎日御軍務御政務をみそなはせられました。これぞ、遠く滿洲の野に、國の爲君のためにと身命さへけて活動してゐる將卒の苦勞を思召されての大御心と拜し奉つて、側近の者誰一人涙を催さぬものとは無かつたのであります。

暑さのきびしい日の午後などに、御汗が御シャツを通し、御ワイシャツを濡し、長くも御上衣までしみ出るのであります。そんな際にも、僅かに涼を奉るものとしては、鐵道局から差上

げた、蓄電池の小さな扇風機だけでありました。此事といひストーヴを御廢止遊ばされたこと
いひ、實際側近にあつて親しく眼のあたり拜し奉つたものでなくては、此の尊き大御心を御
想像申し上げる事は到底出来ぬ次第であります。

暑しともいはれざりけりにえかへる

水田にたてるしづを思へば

しぐれして寒き朝かな軍人

進む山路は雪やふるらむ

右は當時の大御心の御發露で在らせらるゝのであつて、我々が歴史の上に於て傳へ承る遠き
仁徳の御宇の御仁慈を、今眼のあたり見奉る心地せられて、實に感激に堪へなかつたのであり
ます。遠き海のあなたの小笠原島や琉球あたりの民草の上をも、常に御心にかけてせられて、
年に一回位は必ず侍従を御差遣、御内帑金を下し賜はるなど、いとも有りがたい御恵みを垂れ
させられました。常に、遠く隔つた地方の状況などは、一層詳細に御調べ遊ばされたのであり
ました。申すも長き事ではありますが、大帝の御日常は實に御規則正しき御明け暮れを過さ

せられました。一寸一例を申し上げれば四季を通じて、御目覚めも御格子（御寝の間へ入らせ
られる事）も御時刻は五分と御遠ひ遊ばされた事はなく、出御（表御座所へ御出ましに相成る
事）は午前十時三十分より、午後零時三十分まで、午後は二時三十分より七時三十分まで御机
に向はせられて、内外の御政務を御覽遊ばされました。

各省の退出時刻も常なれば四時とか、又暑中なれば正午限りに定まつてゐて、其の時間外に
は拜謁も稀なるに係はらず、御定め時刻までは御政務の御時間として御内儀に入御も遊ばさ
れなかつたのでした。

これは若し事件が出来して火急に奏上を要する拜謁者のあつた時、暫時にても御待たせにな
る事を御心苦しく思召された御事と恐察し奉るのであります。

又、政變の時などは、重臣顯官の參退が烈しいので御寸暇とても在らせられず、繁雜極まる
政情を御躬ら御斟酌の上、それ〴〵御下命遊ばされるなど、實に勿體ない次第でありました。
内閣の交代には相當の理由もある事ではあるが、其の度毎に、大帝の宸禁を惱し奉つた事は恐
懼に堪へませんでした。

或時の御述懐にも『臣下は自分の都合で職を退く事が出来るけれども、朕には辭職の途がない』と仰せられたのには、何と申し上げてよいか御側の者も唯恐れ入つてしまひました。

特に日露戦役中は、宮中に大本營を置かせられた事であり、御日常の其の御繁忙は實に恐懼の極みで、午前といはず夜分といはず、各大臣や參謀總長、軍令部長などが引切りなしに拜謁を願ひ出て、又其の間には御裁可の早きを一刻も争ふ書類が無數に御手許へ差出されるし、臨時に御前會議などと、實に御目まぐるしい一年餘を御過しになりました。隨て日々御定まりの御時刻通りに入御も遊ばされず、御晝の御膳も二時三時に召上る事も度々で、夜分も九時過迄御表で御政務に勤み給ふのが戦時中の御日常で在らせられました。勿論日曜も旗日もなく御精勵遊ばされたのであります。

(元侍從職 石山基陽謹話)

明治大帝と奏上袋に就て

明治大帝が御質素にわたらせ給うたことは、御側近く御仕へ申しあげた人々のみならず御座所に伺候する内閣大臣其の他文武の顯官が、みな目のあたりにこれを見奉りていづれも感激し

てゐた事である。従つて、大帝はいかなる些細のものでも御粗末に遊ばされなかつた、廢物利用と申上げようか、大抵な人々が捨てゝかへりみないやうなものでも大帝はいろ／＼御工夫を御凝し遊ばされて御使用になつた。その中に奏上袋なるものがある。

これは各省から御親裁を仰ぐべき書類を省別に入れて御前に奉る紙袋で二重封筒の形に作られて居るこれを「奏上袋」と稱へて居る。大帝は此の袋の端をナイフで御裂き遊ばされて大きく御展げになる。『どう遊ばされるのであらうか』人々は始め其の御意のほどが判らなかつた。すると大帝はこの袋の裏紙へ御歌を御記しなされてゐた。すらく／＼と御認めになつては紙面が一ぱいになると、御机の御抽斗へ御入れになつて置かれる。

大帝の其の折々に御吟詠になつた御歌は皆この奏上袋の裏紙に御認めになつたもので新しい紙や色紙や短冊に御認めになつたのではない。

かうして御登遐になるまで、外の用紙は御使ひ遊ばされなかつたのである。

(元侍從男爵 澤田宣元謹話)

昭和十一年四月十五日印刷
昭和十一年四月二十日發行
(定價二十錢)

大阪市北區東扇町六番地ノ一

兼發行編輯人 二神 弘

印刷所 文化堂印刷所

大阪市北區東扇町六番地ノ一

發行所 國民教育普及會

振替大阪八四二一三番

終

